

平成29年度 学校評価報告書【国立市国立第一中学校】

<p>学校教育目標</p>	<p>「たくましい、心豊かな人間をめざして」次の目標を設定する。 1. 自ら学び、考え、自主的な行動をしよう。 2. 豊かな創造性を養おう。 3. 思いやる心をもちよう。 4. 健康な心身をつくろう。</p>	<p>重点目標</p>	<p>「共学」「共感」「共有」による学舎の創造 1 確かな学力の向上 共に学ぶ「共学」 2 心の教育の充実 自他を大切に「共感」 3 特別活動の充実 共に育つ「共有」</p>
---------------	--	-------------	--

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価		
					中間評価	最終評価					
確かな学力の向上	③②① 「一交流基礎的びなな共学知識」の「点推し」の習得を支援する授業実践	し共 て同 い学 習に 関し ての 理解 を深 め、 まず は授 業の 中で 実践	学習後、それを活用する場面(活動)をつくる。一般的な内容を具体化する。例えば、『方程式を解くだけでなく文章題を作って立式する』『彫刻刀の知識だけでなく実際にものを作る』など。暗黙知(経験や勘に基づく知識)を形式知(説明・表現できる知識)にできるようになるまで基礎基本を徹底する。	生徒の授業評価アンケート「授業内容は理解できた」「授業内容が分かりやすい」の「そう思う」の割合を80%以上にする。	A	A	多くの授業で、「自力解決→結果を共有」を取り入れたことで、共同学習における効果が上がった。特に、実技教科で数値が大きく伸びている。共同学習を行うほど、主体的な取り組みの数値が高くなっている。だが、主体的な取り組みの数値が高いからといって、授業内容が理解できているとは限らないことも分かった。活動ありきになっており、活動内容がねらいにつながっていないことが理解を深められない大きな要因であると考えられる。また、知識・技能を習得できている、それを活用できる場をつくっていないことも要因であると考えられる。	活動とねらいをしっかりと結びつけて、学びのある活動にしていかなければならない。そのためにも、課題設定を見直し、生徒と課題の共有も大事にしていく。また、知識・技能を習得した後に、それらを活用する場面(活動)も積極的につくっていく。	教員間の指導力の差は乗り越えないといけない問題である。また、主体的な取り組みの数値が高いのに、知識・技能の習得ができていないのも問題である。同じ教科や教科を越えて、教員間で情報共有をして、意思の疎通をはかっていく必要がある。また、学校教育において変わらなければいけないものと、変えるべきでないものを十分に見極めていかなければならない。		
			課題提示の工夫をする。「これは解決したい、しなきゃいけない」と生徒が考える必然性があり、自分からやろうという意欲を生み出す課題設定をする。また、多様な意見や価値観が必要となるような(答えが1つとは限らないような)課題設定をする。	生徒の授業評価アンケート「意欲的に自らすすんで取り組める授業である」の「そう思う」の割合を70%以上にする。	A	B	教員間の指導力の差が大きい。課題提示の仕方や工夫が原因の一つと考えられる。現在、それらが各教員に委ねられているため、力量が数値となって表れている。	教員の授業力、特に質の高い課題設定の工夫について底上げするために、誰でも取り組めるような手法について研究部で構造化を図る。例えば、必然性・意欲・積み重ねという3つの側面において、アンケートや複数の資料を用いて必然性のある課題を設定する。ただし、手法先行とならないようにする。			
			授業内容を工夫する。自力解決→結果を共有(生徒の多様な意見や価値観に触れられる授業)することで、学習の深化を図る授業にしていく。『自分の考えを伝えなきゃ、相手の考えを理解しなきゃ』という授業にしていく。	生徒の授業評価アンケート「自分の意見を理解してもらったり、人の意見を自分が理解することができた」「自分以外の意見や考えに触れる(知る)授業である」の「そう思う」の割合を70%以上にする。	A	A	一教員に対する評価が学年で差がある。教え方が同じでも、1学年では数値が高いが、2学年では低いものがある。共同学習を行う上で、安心して発言できる環境づくりや生徒間の多様な価値観に対する寛容、人間関係の構築が整っていないなどが考えられる。	生徒がどういう風に学んでいきたいかなどのアンケートを取り、それを活用して授業に取り入れれたりするなど、生徒の多様な意見や問い、学びに向かう姿勢を活用した授業作りを検討する。			
心の教育の充実	りい じめ のな い学 校づ く	のい 他じ 者め 理生 まな いた め	生徒の温かい心を育てる活動を行う。生徒会で、「良いことしたPR」「良いことをしていたPR」を生徒全員が行う。6月、11月、2月にスクールバディで朝、昼休み等に各フロアで活動の紹介をして、生徒と触れ合う活動を行う。授業中にその場でほめる機会を積極的につくる。道徳で「友だちの良いところ」見つけ、長所に気づかせる授業を行う。	ふれあい月間いじめについてのアンケートで、「温かい心をもつことができた」「温かい心を行動に表すことができた」と回答する生徒をともに95%以上にする。	B	C	生徒会で、「良いことしたPR」「良いことをしていたPR」ができなかった。6月、11月、2月にスクールバディで昼休みに活動紹介して、生徒と触れ合う活動を行った。授業中にその場でほめる、道徳で「友だちの良いところ」見つける授業ができなかった。3学期アンケートで「温かい心をもつことができた」生徒86%「温かい心を行動に表すことができた」61%であった。温かい心を育てる具体的な活動が意識できていない。	温かい心に触れる機会が少ないので、学校生活の大部分を占める授業での一斉学習からグループで行う学習を増やし、自分の意見を表現し、他の意見を受け入れる他者理解の場を増やす。さらにスクールバディの活動を明確にし、生徒が交流できる場を増やすことの必要性を理解し、あいさつ運動等の生徒同士のふれあい活動を積極的、計画的に行っていく。その中でコミュニケーション能力を身につけさせる。	方策が抽象的で、活動が不十分だった。いじめ防止のために生徒が考えていることも理解しながら、より具体的な方策を立てる必要がある。		
			情報モラル教育の推進	S N S一 中 ル ル 見 直 し	6月に生活委員がSNSの使用状況アンケートを作成する。アンケートでSNSによるいじめ状況を把握する。1学期中にアンケートの意見・結果に基づいて6つのSNSルールの修正案を考える。3学期にSNS東京ノートを使用し、相手の気持ちを考えたコミュニケーションを学習する。	SNSアンケートで、「相手のことを考えてSNSを使っている」と回答した生徒をSNS使用している生徒の95%、「SNSトラブルで困っている」と回答した生徒を全体の5%以下にする。	C	C	6月に生活委員がSNSの使用状況アンケートを作成し、アンケートを実施した。2学期に1年生でSNSルールを確認し、現在の使用状況を理解したうえで6つのSNSルールの修正案を考えた。しかし2、3年生ではできなかった。2学期に1、2年生はSNS東京ノートを使用し、相手の気持ちを考えたコミュニケーションを学習した。しかし、3年生ではできなかった。情報モラル教育計画が明確に示されていず、学校全体に情報モラル推進の必要性が意識づけできなかった。	年度当初にルール見直し計画を明確にする。SNS使用状況アンケート、ルールの再確認、専門家によるSNSの現状についての講演を行う。アンケート、身につけたSNSの知識をもとにクラス討議でルールを見直す。SNS東京ノートを使用してSNSでのコミュニケーション方法について学習する。生活委員会などで生徒を取り巻くSNSの状況を知る機会をもつ。	SNSルールの見直しを通して、ネット利用の光と影をバランスよく指導していく。
			ボランティア活動の推進	化ボ ラン ティア 活 動の 推 進 の 活 性	教職員校内美化活動(桜の掃除、秋の落ち葉掃除等)を企画し、生徒に自主的な活動を促す。ボランティア体験の年間計画を立て、定期的に活動についての啓発方法を考える。ボランティア手帳を作成・配布し、ボランティア参加状況の把握する。スペシャルプランナーとボランティア主催の地域の方との打ち合わせができる体制をつくり、ボランティア活動の意義を理解し発信できるようにする。	夏ボランティアなどの自主的なボランティアへの参加率を全体の10%以上にする。学期末アンケートで、「誰かのために進んで行動する意識を高めることができた」と回答する生徒を60%以上にする。	C	C	学校の落ち葉掃き、雪かきといった学校でのボランティア体験に自発的に参加する生徒が増えた。スペシャルプランナーは地域のボランティア体験に参加した。夏休みボランティア参加生徒は3%であったが、昨年度よりも増加した。ボランティア推進に関する活動は、スペシャルプランナーの積極的なボランティア体験参加が生徒の自発的な参加につながった。しかし、学級活動、生徒集会等の中ではボランティア推進に関する活動ができなかった。	ボランティア活動を推進するスペシャルプランナーの活動を活性化させる。スペシャルプランナーにボランティアセンターなどでボランティアの意義を伝える。身近なボランティアからさらにつなげていくためにボランティア活動の紹介、活動発表、そしてボランティア活動の評価する場を設定する。	地域と連携しながらボランティア体験の場を増やし、ボランティア体験を通して、自ら何ができるのかを考え、実践できる生徒を育てていく。
特別活動の充実	生徒が主体となる学校行事	学校行事の主体的な運営	担任の助言のもと、実行委員が練習の計画、運営をする。	行事アンケートで「クラスで協力して取り組めた」「実行委員が行事の成功に導いた」の回答をした生徒を全体の95%以上にする。	C	B	体育大会、合唱コンクールともに生徒中心に協力しあえた。90%以上の生徒がクラスで協力できた実感している。実行委員、パートリーダーを中心に練習を行った。その中で教員が助言をして、練習の中でクラスで協力体制をつくることができた。	来年度も引き続き、生徒で練習を企画し、必要に応じて助言をして支えていく。	きめ細かい指導により、全生徒の主体的な活動を支えていく。		
			宿泊行事・校外学習などにおいて、生徒同士で、ルールとその意味などについて必要なことを考え、生徒主体の行事を実施する。生徒一人ひとりが係活動を分担し、活動に責任をもつ。	行事アンケートで「自分の担当の活動を責任もって行えた」「充実した行事になった」の回答をした生徒を全体の95%以上にする。	B	C	生徒中心に自分たちが安全に行える行事のためのルールを考える時間を確保できた。決められた活動には責任もって行えた。「自分の担当の活動を責任もって行えた」生徒95%であったが「充実した行事になった」生徒に関しては協力できなかったと感じている生徒が約20%いた。班活動の小集団での協力体制が難しい。	宿泊行事・校外学習行事へ向けて、最初の学習で行事の目的である自主・自律・協力を明確に伝える。行事前の道徳等の授業を通じて、責任の大切さ、規範意識をもつ心を育てる。生徒自身に、全員が楽しみ協力するのに必要なルールを考えさせる。生徒一人ひとりに係活動を分担し、活動に責任がもてる体制をつくる。			

達成状況の指標 A:100%~80% B:79%~50% C:49%~0%